

教科等研究会（小・中学校特別支援教育Ⅲ部会）

令和5年度 研究活動のまとめ

- 1 研究テーマ 子どもの姿から出発する「分かる・できる」「楽しい」授業づくり
～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

2 研究経過

第1回			第2回			第3回			第4回		
6/9	18名	津森小	8/21	益城中央小	講話 実践交流	11/2	木山中	教材研究	1/26	津森小	研究の まとめ

3 研究の概要

(1) 研究の内容

◎第1回

肢体不自由・難聴の2部会に分かれ、障がい種ごとの理事（まとめ役）の決定と第2回、第3回の研修の方向性を考え、第2回の講話の中で聞きたいことを出し合った。（アンケートも実施）

◎第2回

前半は菊池支援学校スーパーティーチャーの宮崎亜紀先生から自立活動についての講話をしていただいた。後半は障がい種別の2部会で日頃の実践や支援や授業に有効な教材教具等について紹介し、質問やアドバイスをし合った。これからの実践に生かしたいという感想が多かった。第3回の内容について各部会で話し合った。

○菊池支援学校 スーパーティーチャー 宮崎亜紀先生の講話より

「子どもの姿から出発する『分かる・できる』『楽しい』授業づくり
～一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

自立活動を中心に以下の内容について講話して頂いた。

1 特別支援教育について（基本的な考え方）

特別支援教育は障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。



2 一人一人の教育的ニーズ

障害による学習上または生活上の困難を見極めることがよりよい支援につながる。また一人一人の障害の状態や特性及び心身の発達の段階を把握して具体的にどのような特別な指導内容や合理的配慮を含む支援の内容が必要かどうかということを検討することで整理される＜教育的ニーズを整理するための3つの観点＞

- ① 障害の状態
- ② 特別な指導内容
- ③ 教育上の合理的配慮を含む必要な支援の内容

3 自立活動と各教科

自立活動＝心身の調和的な発達の基盤に着目して指導するもの
各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っている

4 先生方の質問を一緒に考える（事前アンケートから）

○難聴学級や肢体不自由学級における自立活動の内容（効果的な内容）

⇒内容を考えるときの注意点としては・・・

- ・方法論で授業を行わない（中心的課題を踏まえた指導目標の設定）
- ・集団でも個別の指導目標を達成するための工夫をすること
- ・評価を行い、修正していくこと
- ・「具体的指導内容」の設定をする際に考慮すること

- ☆主体的に取り組む指導内容
- ☆改善・克服の意欲を喚起する指導内容
- ☆発達の進んでいる側面をさらに伸ばすような指導内容
- ☆自ら環境と関わりあう指導内容
- ☆自ら環境を整える指導内容
- ☆自己選択・自己決定を促す指導内容
- ☆自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容

○高校進学や就労について

⇒過去の似たケースに頼るのではなく

- ☆本人がどのようにしたいのか？
- ☆希望にどのようにすれば近づけるか？
- ☆支援者のかかわり方は？
- ☆相談先は？ など、多様な方向から考えていくべき

・どの支援学校が良いかは本人次第

⇒「百聞は一見に如かず」見学や相談を積極的に行う

- ☆生活する場はどうするか？通学方法は？
- ☆医療的配慮はどこまでしてもらえるか？
- ☆基本的環境整備の状態の把握（エレベーターの有無・トイレは使いやすいか？）

<部会ごとの交流の様子>



<宮崎先生から紹介いただいた書籍>



◎第3回

障がい種別の2部会に分かれて研修を実施した。肢体不自由部会は松橋東支援学校の小川俊郎教諭を、難聴部会は、熊本豊学校の斎藤尚美教諭をお招きして研修を行った。

<肢体不自由部会>

事前に先生方から集約した質問事項について、答えて頂く形式で実施した。

主な内容としては

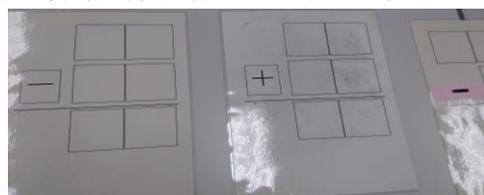
- 医療的ケアが必要な子どもへの対応
 - ⇒教材教具の不十分なところは要望していく。大きいサイズのタブレット 使えるようなアプリ等
- 肢体不自由のみでなく知的な障がいを持つ子どもへの対応
 - ⇒教具の工夫で対応できるものもある



☆計算が苦手な子どもへの対応例

(繰り上がり・繰り下がり)

ひっ算機 (教科書では小さくて書きにくい)



☆時計の読み方が苦手な子どもへの対応例

⇒将来、通学や通勤でバス等を利用する際に、今の時間と時刻表を見比べられるようにする

【例】9時 まだ ちょうど すぎた



<難聴部会>

齊藤先生のご指導の下、先生方が自分の学校でも活用できるような教材の紹介および教材づくりを行った。教材を作りながら、日頃の授業や児童生徒への対応で困っていることなどを共有し、協議した。

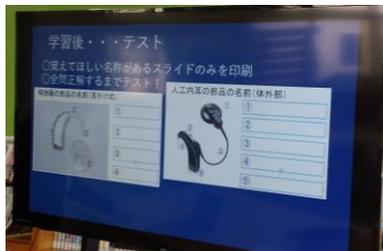


○教材づくりの工夫

☆「聞こえ」の仕組みについて知る



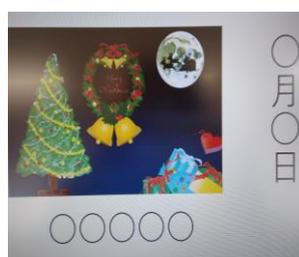
☆「聞こえ方」を助ける道具の名前を知る



⇒特に小学生は写真で、その道具と名称を対応して理解させるようにする

☆言葉を獲得していくうえで、スライドはとても有効

⇒絵や写真と文字を対応させていく（文字の分○や□をつくって言葉を入れていく）



○第4回

本年度の研修のまとめを行い、本年度の反省および次年度に向けての意見交流を行った。第3回で研修した内容で参考になった事例等は全体会で紹介し共有した。

次年度も、実際の授業に生かせるような、もしくは日頃の支援に生かせるような内容を研修で取り上げ、実践につなげられるようにしたい。

(2) 成果と課題

①成果

○障がい種ごとに分けて活動したことで、担任する児童生徒に役立つ情報の共有がしやすくなり、講師の先生や同じ障がい種の部会に属する専門的な知識を有する先生方から支援の方法や自立活動の内容に関するアドバイスやヒントをもらうことができた。これらを参考にして、自らが担任する児童生徒の実態に合わせてアレンジした実践ができた。

○第2回で自立活動の考え方や児童生徒に応じて内容で工夫すべき点を学んだうえで、第3回の実践的な研修を行ったので、先生方のニーズに応じた研修内容となった。また、第2回で日頃の実践で工夫していることや効果的な教材教具、補助具の紹介を障がい種ごとにグループを分けて行うことで十分な交流が図れた。

②課題

▼研修内容の専門性を優先し、障がい種別の部会に分かれて研修を行ったことで、他の部会の活動が見えにくかった部分もあった。

▼担当する児童生徒の障がいの程度も様々で、研修に出席する際に大変な学校もあり、日程の設定が難しい。

▼専門性があるがゆえに、研修を行う際の講師依頼が難しい。

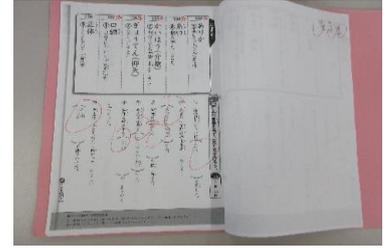
4 実践事例

語彙力の向上や気持ちの表現力向上のためにワークシート等を工夫した取り組み（一部抜粋）

甲佐小学校難聴学級 菊地先生

「言葉力アップ」

語彙を増やすため、言葉のワークシートに取り組んだ。1学期は、「聞いたことはあるけど意味がはっきりとよく分からない。」と感じる言葉を中心に取り組んだ。まず、言葉と意味を覚えるために音読する。次に、覚えた言葉を（ ）に入れる短文づくりをする。答え合わせをし、言葉や意味を初めて知った言葉を短冊に書いて掲示する。さらに、その言葉を使った文を自分で考える。このワークシートと国語の漢字のミニテストを、国語の学習の始めに行き言葉力アップに挑戦している。また、学習中わからない言葉があるときは国語辞典を引いたり、聞いたりして、わからないままにしないようにしている。国語辞典を引いた言葉には付箋を貼り、短冊に言葉と意味を書いて掲示していつでも見ることができるようにしている。



「日記」

家庭学習の一つに日記がある。決められたテーマや自由テーマで毎日日記を書いているが、決まったパターンの文章になりがちである。そこで、日記を基に話をしたり、同じ内容でもいろいろな言葉や表現があることを伝えたりして、日記や文章を書く活動をしている。

「気持ちを表す言葉」

話したり、日記を書いたりするときに、自分の気持ちを表すことが苦手なところがある。気持ちを表情やジェスチャーで表現することがあるので、その気持ちを表す言葉について学習している。いろんな場面の絵や写真を見て、その時の様子や気持ちを考へて言葉を確認していった。いろんな気持ちを表す言葉があることを知り、文を作ったり話したりすることで、自分の思いや考えを伝えるための手段となれるように取り組んでいるところである。

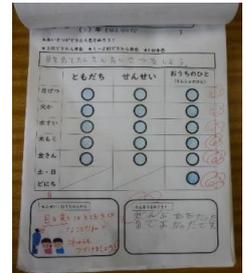


「外国語活動」

外国語活動の時間は、ALT がロジャー、交流学級担任がマイクを使って支援している。担任は必要に応じてノートテイクをしている。ALT の発音をまねして単語や英文を言うことができるようになるまでは、単語や英文にルビをうって練習し、すらすら言えるようになったらルビを消していつている。日直が英語で号令をかけるので、難聴教室でも英語で挨拶したり、日にちを英語でいう練習をしている。

「がんばりカード」

挨拶や発表、人と関わることなどについてのめあてを立てて、頑張りカードに取り組んでいる。挨拶は自分から進んでできるようになっている。しかし、挨拶や発表の時の声の大きさが小さく、伝わらないことがある。「はっきり、大きな声で」と声かけをするが、本人にとって適度な声の大きさなどがよくわからないようなので、よかった時にその都度よいことを伝えるようにしている。また、ロジャーの管理についてもめあてを立てて自分のできるように取り組んでいる。職員室に充電しに来るが、その際先生との関わりが増えていい機会となっている。



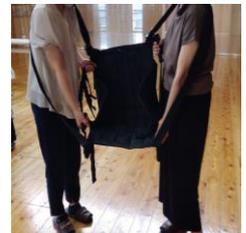
肢体不自由部会・難聴部会それぞれで実践の交流から

<肢体不自由部会>

- 生徒を車いすから移動させるときに使用する道具（御船中 藤川先生）
プールには車いすで移動できないため、この道具を活用し、体育（水泳）に参加できるようにした。支援者が1人でも2人でも使用できる。

ネットでも購入可能

- 中学校への移行をスムーズに行うために（津森小 渡辺先生）
夏休みを利用し、中学校の校舎見学を実施した。車いすで実際にエレベーターに乗ったり、教室や特別教室に入って、車いすでの動きをシミュレーションしてすることで不安が解消され、2学期に授業の様子を見たいという意欲にもつながった。



<難聴部会>

- 授業づくり・教材づくりに有効な書籍の紹介
（広安小 樋口先生）

